「日本の戯曲研修セミナー」in 東京 2021《オンライン版》

【プレ企画】 7/5 (月) 19：00～21：00 「日本の近代演劇の女性作家概観」 ゲスト：井上理恵

TANAKA CHIKAO
田中千禾夫
『国語』

1905 年長崎市生まれ。慶応義塾大学在学中に岸田國士らの指導を受け、1933 年にデビュー作『おふくろ』を「劇作」に発表、築地座で上演され一躍注目。1934 年、田中澄江と結婚。1937 年文学座創設に参加。戦後、千田是也に請われ俳優座演出部員となる。1954 年『教育』初演。三島由紀夫は「岸田國士氏の仕事の、本当の意味での継承者」と述べた。『マリアの首』で岸田演劇賞、文芸選奨文部大臣賞。評論『劇的文体論序説』で毎日出版文化賞。1995 年没。『国語』は 1966 年に俳優座によって初演。

8/2 (月) 18：00～21：30
戯曲に登場する「国語」を読む

田中千禾夫『国語』には、様々な時代の「国語」の語り手が登場する。1 日目は、まずこの戯曲を声に出して読みながら、「国語」の語り手をリストアップし、その特徴や主張を探る。

8/3 (火) 18：00～21：30 ゲスト：安田敏朗
18：00～ **レクチャー「近代日本における「国語」の歴史」**
20：00～ **「国語」そして「美しい日本語」とは何か**

近代日本言語史の安田敏朗氏によるレクチャーを皮切りに、田中千禾夫が書いた俳優術『物言う術』を手がかりとして、作家の主張を探る。中でも「正しい」「美しい」とされる日本語が何か、という点について議論する。

8/4 (水) 18：00～21：30
戯曲の全体像を掴む、作家を知る

『国語』が書かれた時代の情勢や、作家田中千禾夫について知る。また、俳優／演出家など参加者一同で、この戯曲に対する素直な感想を共有する場を設けたい。各々の異なった視点を集めることで、『国語』の全体像を炙り出す。

8/5 (木) 18：00～21：30 ゲスト：佐々木宏
18：00～ **レクチャー「高校の「国語」って、今どうなってるの?」**
20：00～ **「国語」の変化を読む**

1966 年に書かれた『国語』には、現在（2021 年）までの 55 年間の「国語の語り手」が登場しない。時代の流れで更新され続ける「今どきの若者」の姿、そして彼らが口にする「国語」の形を探りながら、日本史に付箋をつけていく。また高校国語教員である佐々木宏氏によるレクチャーを開催する。

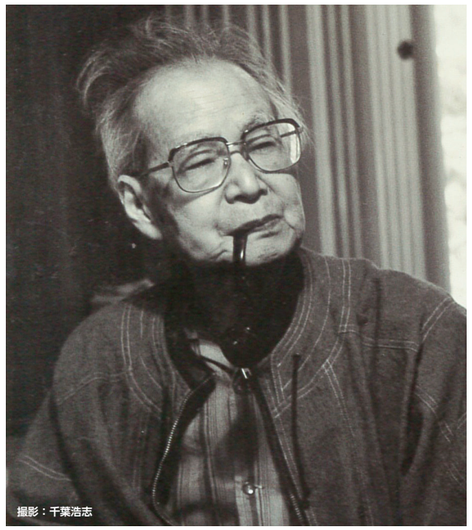
8/7 (土) 13：00～18：00
俳優の身体で「国語」を探る

ここまでのオンラインで発見した、甲冑から咲太郎までの歴代「国語の語り手」たちを、俳優がどのように演じ分けるべきか、実際に声を出し、動きながら研究する。

7・8 日は シアターX から生中継いたします

8/8 (日) 13：00～18：00
俳優の身体にインストールする

田中千禾夫の挑戦的な演劇に挑む。つまり、過去現在様々な時代の「国語の語り手」を同じ舞台に乗せて議論させる。ティーチ・インが繰り広げられる「5 の巻」を中心として、2021 年版『国語』を実験的に立ち上げる。


撮影：千葉浩志

『国語』に取り組む 演出家 ※ ―― 豊永純子

演出家。1988 年神戸市生まれ。東京藝術大学 美術学部 先端芸術表現科卒。同大学院修了。今までゲーテ、チェーホフ、岸田國士、別役実などの戯曲を演出。瀬戸内国際芸術祭 2019 で香川大学や農村歌舞伎保存会、地域の方々と共に演劇を制作。『トラと呼ばれたサル』『蛙の池の今昔物語』脚本、演出。新潟・京都・広島・島根でも、地域特有の文化・歴史をリサーチし公演や滞在制作を行ってきた。最新作は映画『パン屋文六の知らん』（原作：岸田國士）の脚本、監督。
https://junko.work/works/

※ 演出家の公募を行い、決定いたしました

「国語」に取り組む 俳優

天野眞由美（劇団俳優座）

斉藤沙紀（劇団新派）

津田真澄（劇団青年座）

中村早香（アマヤドリ）

矢内久美子（創造集団g-クラウド）

― ほか

■ 担当実行委員：蔵人、丸尾聡、吉田康一 ■ コーディネーター：川口典成

TANAKA SUMIE
田中澄江
『鳥には翼がない』

8/21 (土) 18：00～ **イントロダクション**
18：15～21：30 **戯曲を読む**

8/27 (金) 18：00～ **トーク「私からみた、舅（ちち）と姑（はは）」** ゲスト：三田恭子
19：30～21：30 **戯曲を読む**

8/28 (土) 18：00～ **レクチャー「北海道開拓期の素人芝居」** ゲスト：高橋克依
19：30～21：30 **ディスカッション**

8/29 (日) 18：00～21：30 **ディスカッション&プレゼンテーション**

撮影：笹本恒子

1908 年東京生まれ。1932 年、同人誌「夷狄」に『海』『月夜の新聞』を発表。同年、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）国文科を卒業し、聖心女子学院に就職。1934 年、田中千禾夫と結婚。1936 年から菊池寛の戯曲研究会に参加し、その後「劇作」に『はる・あき』などを発表。戦後には劇作と同時に、木下恵介や成瀬巳喜男監督作品の映画シナリオを担当。また朝の連続テレビ小説『うず潮』『虹』なども執筆した。2000 年没。

ゲスト プロフィール

井上理恵（演劇学）

桐朋学園芸術短期大学特別招聘教授。演劇学・劇作家論・演劇史専攻。フェミニズムの視点で演劇研究・批評に取り組む。現代演劇のあらゆるジャンルを対象に劇評を書く。『ドラマ解読 映画・テレビ・演劇批評』。最近の著書に『清水邦夫の華麗なる劇世界』『宝塚の 21 世紀 演出家とスターが描く舞台』。女性劇作家論に「岡田八千代論」「秋元松代論」等々がある。ブログ「井上理恵の演劇時評」を 2010 年からネット上で公開。

安田敏朗（近代日本言語史）

1968 年神奈川県生まれ。1996 年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。現在、一橋大学大学院言語社会研究科教員。近代日本の時空間におけることばのあり方について、あれこれと考えている。主な著作に『植民地のなかの「国語学」』（三元社、1997 年）、『「国語」の近代史』（中公新書、2006 年）、『漢字廃止の思想史』（平凡社、2016 年）、『「国語」ってなんだろう』（清水書院、2020 年）などがある。

佐々木宏（国語教諭）

東京都立総合芸術高等学校指導教諭（国語）。1961 年生。平成 3 年 29 歳で入都。30 年間いろいろな都立高校で国語の授業を行う。10 年来アクティブ・ラーニングの開発普及につとめる。近年は、国語の授業の他に若手教員の育成、学校と企業や公共との連携事業の創出を行なっている。また演劇アーティスト等と連携しながら、教育 × 演劇 × 地域の可能性を具現化する取り組みを種々試行している。

三田恭子（画家）

1942 年東京生まれ。女子美術大学洋画科卒業。個展・本の挿絵・装丁の仕事。1968 年田中千禾夫と田中澄江の長男である田中聖夫と結婚。1988 年、夫・聖夫と「嫁菜の花美術館」を設立。著書に『嫁菜の花』（主婦と生活社）、『姑と嫁』（海竜社）。

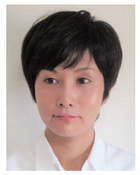
高橋克依（演劇研究）

神奈川県小田原市生まれ。北星学園大学文学部英文学科教授。早稲田大学教育学部卒、同専攻科修了。中央大学大学院、マッコーリー大学大学院修了。アメリカと日本の演劇を研究。書著に北海道篠路村で明治後期より昭和初期まで行われていた素人芝居（地芝居）について考察した『篠路村烈々布素人芝居』。

ディスカッション参加者（括弧内は主な活動拠点です）

安藤奎（東京）

池田美樹（熊本）


石原美か子（神奈川）

市川洋二郎（東京・ロンドン・NY）

岡井直道（石川）

片岡友美子（栃木）

川津羊太郎（熊本）

菊沢将憲（東京）

三瓶竜大（北海道）

田中春彦（北海道）

都甲マリ子（宮城）

豊永純子（東京）

撮影：引地信彦
西尾佳織（東京）

森田あや（神奈川）

山田恵理香（福岡）

＋ 日本の戯曲研修部〈東京〉実行委員会 司会進行：秋葉舞滝子、篠本賢一

■ 担当実行委員：黒澤世莉、篠本賢一、平野智子 ■ コーディネーター：川口典成

セミナー見学参加者募集！